奄美諸島の鳥類について

御 厨 正 治*

Summary

Some field notes on birds of Amami
Islands, Northern Ryukyus.

Masaharu Mikuriya

In May 1962 the author made bird observations on three major islands of Amami group. The itinerary and number of species observed on each island were as follows :

May 22-26	Amami-Oshima I.	34 sp. (3 sp. new to the island)
May 27-30	Okino-Erabushima I.	27 sp. (10 sp. do)
May 31-Jun 1	Tokuno-shima I.	22 sp. (5 sp. do)

During eleven days investigation 49 species were recorded. Of these, *Ghaetura caudacuta*, *Egretta garzetta* and *Ardea purpurea* were first reported from the Amami group. Some new field observations were made on the following species :

1. *Muscicapa narcissina yakushima* : It has been reported as uncommon on the breeding islands. Two male birds of this race were observed on Amami-Oshima : one in the broad-leaved evergreen forest at the altitude of 150 m, and another in the bamboo grove 200 m above sea level. This suggests that the vertical range of this race is lower than that of *M. n. narcissina* in central Honshu in summer.
2. *Hirundo tahitica namiyei* : The nesting site of this swallow hitherto known was under the caves of a house or on a cliff or in the depths of a cave. The author found this swallow nesting on the underside of a concrete bridge at the outskirts of Nase, Amami-Oshima. The nest had been broken by man at its early stage of building. However, a new nest was found being rebuilt at the same spot.

* 農林省有益獣増殖所

3. *Demigretta sacra ringeri*: The white phase of this species is said not to occur in Japan proper. The author observed one individual of this white phase on Tokuno-shima I. and three on Okino-Erabushima I. On the latter island, a pair of white and dark birds was found nesting. This is the first record of their interbreeding in Japan. The nest with four eggs was found at 5 m. above sea surface on a branch of *Scaevola frutescens* growing from a cliff. The nest material was chiefly dry twigs of *Osteomeles subrotunda*. It measured 40×35 cm in outside diameter, 19×15 cm. inside, and 14 cm. in height. The four eggs were non-glossy pale blue, the measurements being 50×34.5 mm., 49×35 mm., 48×35 mm., and 48×35 mm.

緒 言

筆者は1962年5月21日鹿児島を出港して、奄美大島～沖永良部島～徳之島の順に鳥類を観察し、6月2日鹿児島に帰港した。

奄美地方は丁度この季節が狂暴なハブの活動期に当るので、山野の跋涉はとかく敬遠されがちであり、したがって最近の報告も冬鳥滞留期間(10月～4月)のものが比較的多い。この意味において、筆者の今回の報告に参考となる点があれば幸いである。

本稿をまとめるに当たり、琉球産鳥類研究の有益な著書を賜った宇田川竜男博士に深甚の感謝を捧げる。

調査行程 (Fig. 1 参照)

5月22日 (曇・驟雨), 奄美大島名瀬。観察鳥類9種。

5月23日 (晴時々曇), 名瀬～朝戸～城 (徒歩約 21km)。観察鳥類20種。

5月24日 (曇・驟雨), 城。鳥類21種。

5月25日 (晴), 城～見里～西仲間(徒歩約 15km), 西仲間～古仁尾(バス)。鳥類27種。

5月26日 (雨), 奄美大島古仁尾～徳之島亀徳～沖永良部島和泊 (汽船)。鳥類7種。

5月27日 (雨), 沖永良部島和泊及びその付近。鳥類19種。

5月28日 (雨), 和泊。鳥類10種。

5月29日 (雨), 和泊。鳥類11種。

5月30日 (曇・晴間), 和泊～知名 (バス往復)。鳥類17種。

5月31日 (晴時々曇), 徳之島平土野～轟木～花徳～山 (徒歩約 15km), 山～亀徳 (バス)。鳥類20種。

Fig. 1 Map showing the position of Amami Islands, with author's observation routes.

6月1日(晴), 徳之島亀徳〜奄美大島名瀬(汽船)。鳥類6種。

分布上の知見

これまで奄美諸島から採集や観察により記録された鳥種はおよそ135種(及亜種)を数えるが, 今回の踏査で筆者が確実に認めた種類は48種(及亜種)で, 約35%に当たる。

また本諸島にて蕃殖する特産種と南系種27種(及亜種)のうち, 今回記録されたものは22種(及亜種)で, 約81%の観察率である。

筆者が観察した全種類はその観察個体数と共に, 後掲の Table 1 に示した。

本項では奄美大島・徳之島・沖永良部島より従来全く未記録であった種類、及びこれ迄報告例の少ない種類についてのみ記述する。

1. 奄美大島

Chaetura caudacuta ハリオアマツバメ

23・V・1962, 和瀬隧道(海拔258m)上空に5羽。大形で翼形は *Apus pacificus* と異なり巾広く、角尾を有する。恐らく渡りの途中のものであろう。琉球列島初記録。

Egretta intermedia チュウサギ

25・V・1962, 西仲間の水田に1羽。羽冠を欠き、嘴は黒色で *E. alba modesta* よりも短かく、目先裸出部は黄色。本島ではこの他に清棲(1963)の観察例がある。

Egretta garzetta コサギ

25・V・1962, 城の水田に2羽。羽冠顕著で、嘴は黒色、趾は黄色。奄美諸島より初記録。

Bubulcus ibis アマサギ

25・V・1962, 城の水田に2羽。1羽は鮮やかな夏羽で、別の1羽は頭部に僅かオレンジ色を帯びるに過ぎない冬羽であった。本島ではこの他に下村(1936)の観察例がある。

Anas poecilorhyncha カルガモ

25・V・1962, 城の水田に2羽。嘴先端黄色、飛翔時は翼下面の白色と胴の暗褐色との対照顕著。

2. 徳之島

Cisticola juncidis セッカ

31・V・1962, 平土野の草生地に数羽：1・VI・'62 亀徳の草地に数羽など。全島低地の草生地に生息し発声旺盛で、蕃殖も確実であろう。

Demigretta sacra クロサギ

31・V・1962, 金見崎付近の岩磯の上に白色型1羽。全体白色、羽冠全く欠き嘴黄色、脚暗黄緑色、趾裏は鮮黄色。

Ixobrychus cinnamomeus リュウキュウヨシゴイ

31・V・1962, 轟木の水田に1羽、花徳の農家庭先に1羽。飛立時の翼上面は赤褐色。この他に三島(1961)の標品記録がある。

Anas poecilorhyncha カルガモ

31・V・1962, 山港付近の干潟に1羽確認。

Calonectris leucomelas オオミズナギドリ

26・V・1962, 亀徳港外の海面を渡る 2 羽。頭部はゴマ塩状で、下面全体は白色。

Tringa hypoleucos イソシギ

31・V・1962, 山港付近の干潟に 1 羽。啼声と飛翔時の翼動に特徴あり。この島ではさきに三島 (1959) の標品記録がある。

Gallinula chloropus バン

31・V・1962, 花徳付近の水田に 2 羽。体側の白条と、下尾筒の白色顕著。

3. 沖永良部島

Corvus leuallantii ハシブトガラス

27・V・1962, 和泊で 4 羽 : 30・V・1962, 知名にて 6 羽。亜種名は *connectens* であろう。観察例としてさきに小林 (1930), 藤本 (1960) の報告がある。

Sturnia philippensis コムクドリ

30・V・1962, 和泊付近の原野の木立に 11 羽。♂は頸側の栗色斑顕著。奄美諸島では大島に於ける下村 (1936) の観察例 1 例に過ぎなかったが、4~5 月の渡りの候には奄美諸島を定期的に経由するのではなかろうか。

Hypsipetes amaurotis ヒヨドリ

27・V・1962, 和泊で数羽 : 30・V・'62, 知名で数羽 etc.。亜種名は *ogawae* であろう。さきに藤本 (1960) の観察例がある。

Terpsiphone atrocaudata サンコウチョウ

27・V・1962, 和泊付近で 1 羽 : 30・V・'62, 知名で 1 羽の囀声。亜種は *illex* であろう。

Cettia diphone ウグイス

30・V・1962, 知名で 7 個体の囀鳴。亜種名は *riukiensis* と思われる。さきに小林 (1930) の観察例がある。

Acrocephalus arundinaceus オオヨシキリ

30・V・1962, 和泊付近海岸の原野で囀鳴中の 1 羽確認。

Hirundo rustica ツバメ

27・V・1962, 和泊で電線上に 2 羽 : 30・V・'62, 和泊海岸を飛翔する 4 羽。第 1 例の 2 羽は *H. tahitica* 3 羽と同じ電線に並んで休息中のものであった。

Hirundo tahitica リュウキュウツバメ

27~29・V・1962, 和泊付近で 5 羽 : 30・V・'62, 知名で 2 羽。観察例として既に小林 (1930) の報告が知られている。

Ardea purpurea ムラサキサギ

30・V・1962, 知名で飛翔中の1羽。飛翔時の全長はアオサギよりも脚が短かいので、比較的短かく見える。下面は赤褐色で、幼鳥と思われた。奄美諸島より初記録。

Streptopelia orientalis キジバト

27・V・1962, 和泊で5羽: 30・V・'62, 知名で5羽。亜種名は *stimpsoni* であろう。さきに藤本(1960)の観察例がある。

Tringa incana キアシシギ

28~29・V・1962, 和泊海岸で2羽。体下面の波状斑の状態は基亜種 *incana* ではなくて、間違いなく *brevipes* であった。

Tringa hypoleucos イソシギ

30・V・1962, 和泊海岸のサンゴ礁に2羽と1羽、計3羽を確認。

Xenus cinereus ソリハシシギ

29・V・1962, 和泊海岸で2羽。嘴は上向し、脚短かくオレンジ色。

Numenius phaeopus チュウシャクシギ

29・V・1962, 和泊海岸で1羽確認。

Calidris ruficollis トウネン

29・V・1962, 和泊海岸で5羽。顔や胸が赤褐色の夏羽の個体は4羽で残り1羽は冬羽であった。

生態的知見

Muscicapa narcissina jakuschima HARTERT

ヤクシマキビタキ (アマミキビタキ)

琉球列島にて繁殖するキビタキは従来3亜種に分類されているが、本稿では日本鳥類目録(1958)に従って、一応ヤクシマキビタキとアマミキビタキを同一亜種として取扱う。

本亜種の生態について蜂須賀・宇田川(1953)は“common on Amami... breeds in May and June in the forests often 'not far from villages.'”と述べ、日本鳥類目録(1958)には“Not common on the breeding islands.”と記されている。

さて、今回の踏査による本亜種の生息状況は次の通りで唯2例が観察された。

第1例: 24・V・1962, 奄美大島住用村城国有林(海拔約150m)にて囀鳴中の1♂。生息環境はオキナワジイ・オキナワウラジログシ・イスノキ・タブ・

フカノキ・イジュ・ヘゴノキ等が昼なお暗く繁茂する暖帯、亜熱常帯森林である。囀鳴はピールリホイと聞えるものを一節づつ繰返し、時々ピールリホイ、ピールリコと2節続けて囀ることがある。声の性質は基亜種と全く同様で、囀鳴も内地のキビタキと同じ単一歌節型 Single song type (川村, 1947) に属するが、遙かに単純で短い。

第2例: 25・V・1962, 住用村見里より西仲間に至る県道沿いの竹林 (海拔約200m) にて1匹。生息環境は第1例とは著しく異なり、かつ明るい。野外観察による基亜種との羽色の相異点は頭部から背までは暗オリーブ緑色、喉は黄色 (橙赤色を帯びない)、翼の白斑は大きいこと等を挙げ得る。山階 (1941) によれば本亜種に近似のリュウキュウキビタキ *M. n. owstoni* の喉の色には黄色のものと、橙赤色のものとがある由であるが、本亜種の場合も喉の色に個体差が認められるかも知れない。囀鳴はポーピョ、ピーピコイ、ポーピョの反覆で、第1例同様の単純で短い単一歌節型の囀りである。囀鳴の位置は林内の枝上で、梢や枝先には姿を現わさない。

上記の2例によれば奄美大島に於ける本亜種の垂直分布は海拔150~200mであるが、白井 (1956) による尾久島の例は200~350mであった。蜂須賀・宇田川 (1953) の記述にも照らして、本亜種の繁殖期における垂直分布は基亜種 *M. n. narcissina* に比較して著しく低いものと推察される。

Hirundo tahitica namiyei (STEJNEGER)

リュウキュウツバメ

奄美大島における本種の生息状況は報文によってかなり相異している。これはその調査年代や季節差によるものであろうが、概して近年は減少の傾向が認められるようである。

下村 (1936), 蜂須賀・宇田川 (1953) は「非常に多い」と記し、小林 (1930) は「普通ではない」と述べ、藤本 (1960), 御厨 (1964) は「著しく少ない」と記述した。筆者の観察した個体数は次のとおりであった。

奄美大島	名瀬	4羽	22~23・V・1962
	城	1羽	23・V・'62
	古仁尾	13羽 (幼鳥共)	26・V・'62
徳之島	亀徳	2羽	1・VI・'62
沖永良部島	和泊	5羽	27~29・V・'62
	知名	2羽	30・V・'62

本種は名瀬の町に非常に多いとする前記文献 (1936) (1953) に比較して、

Fig. 2 Nest-site of *Hirundo tahitica* on Amami-Oshima (May 23, 1962. M. Mikuriya).

- a. The concrete bridge under which the nest was found.
b, c. Showing the nest attached on the underside of the bridge.

この結果はむしろ意外であり、名瀬市の中心地では家屋営巣例はおろか飛翔例すら記録に留め得なかった。名瀬における上記の4羽は町の中心より南寄りの真名津町での所見で、ここに於て意外な場所での営巣例が初めて観察された。

本種の営巣場所について、小林(1930)は人家の軒、崖、洞穴の奥を挙げ、蜂須賀・宇田川(1953)は大建築物に営巣すると記している。今回、筆者が発見した例は、コンクリート製石橋の下面(裏面)の一隅が営巣場所選ばれていた(Fig. 2参照)。

1巢は人為的に破壊されて土の形跡を僅かにとどめる程度に過ぎず、他の1巢も毀された跡が歴然と認められ、旧巢と同じ位置に再造営中のものであり、その進捗状況はようやく20%程度であった。

Demigretta sacra ringeri (STEJNEGER)

クロサギ

本種には黒色型（普通型）と白色型の2形があり，白色型について小林（1956）は「白色形のは南方に多いらしく，日本産のものは殆んど黒色形で，稀に中間形のものがある」と述べ，日本鳥類目録（1958）は“*No white bird occurs*”と記している。

ところが，筆者の調査によれば，奄美諸島では白色型は必ずしも稀ではなく，その色型別観察個体数は次のとおりであった。

奄美大島 見 里 黒色型 2羽 25・V・'62

徳之島 金見崎 白色型 1羽 31・V・'62

沖永良部島 和泊 黒色型 4羽 29・V・'62，白色型 3羽

筆者は5月29日幸運にも，沖永良部島和泊に於て，クロサギの1巣を発見しこれを調査することが出来た。特に興味ある点は，この巣の主は黒色型と白色型との両個体が番を形成していたことである。海外ではこれらの点は既に明らかで，例えばオーストラリア産の本種について Cayley (1958) は “*the two forms interbreed...white-plumaged birds are found in tropical regions.*” と記述しているが，わが国では今回初めて報告されるものである。巣上に黒色個体が抱卵している場合と，白色の個体が入れ代りに抱卵している場合とが観察されたが，これによって両性とも抱卵に従事することが同時に確認されたことになる。

さて，筆者が調査した本種の繁殖生態は次のとおりであった。（Fig. 3 参照）

営巣場所：海岸の岩壁の途中から横に伸び出したクサトペラ *Scaevola frutescens* の枝上に構巢されており，海面からの高さは約5mである。岩壁の上にはアダン *Pandanus tectorius* var. *liukuensis* 及びソテツ *Cycas revoluta* が密生して，上方より侵入，降下することは不可能な位置にある。

巢 材：おもな材料としてイソザンショウ *Osteomeles subrotunda* の枯枝を使用しており，その他少量のテリハノイバラ *Rosa wichuraiana* ススキ *Miscanthus sinensis* 等の枯枝と枯茎で構成されている。産座には極く少量のソテツの枯葉が認められたが，これは上方に繁茂する自然林より落下したものとも考えられよう。

巢の測定値 (cm)：外径 40×35，内径 19×15，高さ（厚さ）14。この巢は小林・鳥居（1954）の記録に比較して著しく小形である。

卵の測定値 (mm)：No. 1：50×34.5， No. 2：49×35， No. 3：48×35，

Fig. 3 The nest of *Demigretta sacra* and the Surroundings (May 29, 1962. M. Mikuriya).

a. The surroundings of the nest.

b. the nest in close view.

No. 4: 48×35。一腹の卵数は4個で、淡青色無斑、光沢を欠いている。本種の卵数について山階(1941)は通常は3個で稀に2個又は4個の事があるに過ぎないと記されたが、小林・鳥居(1954)の3例では4卵・4卵・5卵であり、佐藤(1960)の3例によれば4卵・4雛・5卵であるから、一巢4個の場合が最も普通であるらしい。

本種の鳴声についてはこれまで発表例をみないが、筆者は5月29日和泊海岸で、サンゴ礁の波打際に着陸直前の黒色型1羽が「グァーツ」とただ1声、シラサギ類と同質の声で発声したのを確認することが出来た。

鳥の俗称二、三

近年は僻地のローカル色は次第に失われてゆく傾向が強いが、鳥の俗称についても同様で、奄美地方でもルリカケスはわざわざ現地名のヒョーシャを用いなくても標準と名で通用するし、スズメもユムドイを使用せずともこと足りる。ところが孤島の中には尚興味ある俗称が温存されている場合があるので、その中から従来未採録と思われるものについて記してみる。

ドクドイ 沖永良部島におけるリュウキュウサンコウチョウの称である。ドクドイとは毒鳥の意味で、この鳥がとまった枝に触れたり、その枝を折取ったりすると手がくさると云われる。

三光鳥と樹木の保護には多少有効な俗信であろうか。

ヒバリ 沖永良部島に於けるセッカの俗称である。同島にはセッカが極めて多く、内地のヒバリと同環境に生息するので、精糖会社に勤務する内地からの移住者がセッカをヒバリと誤称したものが次第に流布したものであろう。

ユタ・パパヤガラス 沖永良部島に於けるイソヒヨドリの称である。ユタの意味は不明であるが、この方が島本来の俗称らしい。パパヤガラスは内地からの移住者により始められた呼称らしいが、その意味はパパイヤの実を喰害するガラスに似た黒っぽい鳥というところであろう。しかし本種が果実を好喰するものかどうか明らかなので、ヒヨドリとの混同もあるのではないかと思われる。

カラハト 沖永良部島におけるリュウキュウキジバトの称である。甘藷をカラハトと称する如く、カラハトとは唐鳩の意味かと思われる。南九州地方、鹿児島県、宮崎県などに於ても、キジバトのことをカラハトと称するようである。

Table 1 Number of birds observed on Amami IS. in May
22~June 1, 1962.

Species	Amami-Oshima	Tokuno-shima	Okino-Erabushima
<i>Corvus leuallantii</i> (<i>connectens</i>)	Abundant	1	10
<i>Garrulus lidthi</i>	15		
<i>Sturnia philippensis</i>			11
<i>Passer montianus</i>	Abundant	Abundant	Abundant
<i>Zosterops palpebrosa</i> (<i>loochooensis</i>)	12	2	Abundant
<i>Parus major</i> (<i>amamiensis</i>)	Common	7	
<i>Parus varius</i> (<i>amamii</i>)	5		
<i>Hypsipetes amaurotis</i> (<i>ogawae</i>)	Abundant	Common	Common
<i>Pericrocotus roseus</i> (<i>tegimae</i>)	9		
<i>Terpsiphone atrocaudata</i> (<i>illex</i>)	19	6	2
<i>Muscicapa narcissina</i> (<i>jakuschima</i>)	2		
<i>Cettia diphone</i> (<i>riukiuensis</i>)			7
<i>Acrocephalus arundinaceus</i>			1
<i>Cisticola juncidis</i>	11	Common	Abundant
? <i>Turdus</i> sp.	2		
<i>Monticola solitarius</i>	1	5	18
<i>Erithacus Komadori</i>	11		
<i>Hirundo rustica</i>			6
<i>Hirundo tahitica</i>	18	2	7
<i>Chaetura caudacuta</i>	5		
<i>Alcedo atthis</i>	4	7	2
<i>Halcyon coromanda</i> (<i>bangsi</i>)	15	3	2
<i>Dendrocopos leucotos</i> (<i>owstoni</i>)	9		
<i>Dendrocopos Kizuki</i> (<i>amamii</i>)	1		
<i>Otus scops</i> (<i>elegans</i>)	3		
<i>Ardea purpurea</i>			1
<i>Egretta intermedia</i>	1		
<i>Egretta garzetta</i>	2		
<i>Demigretta sacra</i>	2	1	7
<i>Bubulcus ibis</i>	2		

Species	Amami-Oshima	Tokuno-shima	Okino-Erabushima
<i>Nycticorax nycticorax</i>	1		
<i>Ixobrychus cinnamomeus</i>		2	1
<i>Anas poecilorhyncha</i>	2	1	
<i>Calonectris leucomelas</i>		2	
<i>Columba janthina</i>	4		
<i>Streptopelia orientalis (stimpsoni)</i>	8	1	10
<i>Sphenurus formosae</i>	9		
<i>Tringa incana</i>	4	3	2
<i>Tringa hypoleucos</i>	1	1	3
<i>Xenus cinereus</i>			2
<i>Arenaria interpres</i>		5	9
<i>Numenius phaeopus</i>			1
<i>Calidris ruficollis</i>			5
<i>Charadrius mongolus</i>			1
<i>Charadrius alexandrinus</i>		10	12
<i>Sterna dougallii</i>	25		
<i>Sterna sumatrana</i>	2	5	
<i>Gallinula chloropus</i>		2	
<i>Turnix suscitator</i>			4

- 要 約 : 1. 筆者は1962年5月22日より6月1日まで奄美諸島の奄美大島、徳之島、沖永良部島の鳥類を調査した。
2. この調査により、奄美大島より34種（新報告3種を含む）、徳之島より22種（新報告5種を含む）、沖永良部島より27種（新報告10種を含む）が記録された。その全種類及び観察個体数を Table 1 にて示した。
3. 奄美大島でヤクシマキビタキ（アマミキビタキ）が唯2例観察されたが、その生息環境・鳴声・垂直分布等について述べた。
4. 奄美大島名瀬で、リュウキュウツバメがコンクリート製石橋の裏面に造巢する例が発見された。
5. 奄美諸島に於てはクロサギ白色型（いわゆるシロクロサギ）は必ずしも稀ではなく、沖永良部島では白、黒両型が番を構成している1例が観察された。その1巢について営巣場所、巢材、測定値等を記した。また鳴声の1例についても併せて記した。

6. 鳥の俗称の中から、従来未採録と思われるもの 5 例について紹介した。

参 考 文 献

- 内田清之助 1921: 鹿児島県奄美大島ノ動物ニ関スルモノ, 天然記念物調査報告第23号
 小林 賢三 1930: 琉球諸島産鳥類並びに鳥卵の採集品に就て, 鳥 6 (30)
 黒田 長禮 1933: '34, 鳥類原色大図説, 1 ~ 3
 山階 芳麿 1934: '41, 日本の鳥類と其生態, 1 & 2
 下村 兼史 1936: 北の鳥南の鳥
 黒田 長禮 1939: 琉球孤島の鳥界, 野鳥 6 (1)
 小林 桂助 1940: 沖縄島の旅, 野鳥 7 (8)
 桑田 鉄也 1940: 奄美大島紀行, 野鳥 7 (8)
 日本鳥学会 1942: A hand-list of the Japanese birds (3rd ed.)
 川村多実二 1947: 鳥の歌の科学
 清棲 幸保 1952: 日本鳥類大図鑑, I ~ III
 Hachisuka, M. & Udagawa, T. 1953. Contribution to the ornithology of the Ryukyu Islands. Quart. J. Taiwan Mus. 6 (3・4)
 小林平一・鳥居主計 1954: 本州に於けるクロサギの蓄殖について, 野鳥 19 (3)
 小林 桂助 1956: 原色日本鳥類図鑑
 白井 邦彦 1956: 尾久島の野生鳥獣相及び屋久犬, 鳥獣集報 15 (1)
 三島 冬嗣 1957: 琉球諸島産キビタキの亜種に就いて, 鳥 14 (68)
 日本鳥学会 1958: A hand-list of the Japanese birds (4th ed.)
 Cayley, N. W. 1958: A guide to the birds of Australia (Revised and enlarged ed.)
 三島 冬嗣 1959: 徳之島及び種子ケ島から未記録の数種の鳥類, 鳥獣集報 17 (1)
 佐藤 春雄 1960: 佐渡ヶ島に於けるクロサギの蓄殖について, 鳥 15 (76)
 藤本 重広 1960: 奄美・トカラの鳥, 日本野鳥の会大阪支部研究部報, 2 (6)
 三島 冬嗣 1961: ミクロネシア・朝鮮・日本からの新記録の鳥, 鳥 16 (78)
 清棲 幸保 1963: 奄美大島にルリカケスを訪ねて, 野鳥 28 (3)
 加藤 昌宏 1964: 冬の奄美大島採鳥記, 野鳥 29 (2)
 御厨 正治 1964: 観察雑録 (2) リュウキュウツバメ, 野鳥 29 (5)
 清棲 幸保 1965: 日本鳥類大図鑑 (増補新訂版), I ~ III
 杉本 順一 1965: 日本樹木総検索誌 (増補改訂版)
 大井次三郎 1965: 日本植物誌 (改訂新版)